

芥川龍之介全集

6

筑摩全集類聚

筑摩書房

芥川龍之介全集第六卷

昭和四十六年八月五月初版第一刷発行
昭和四十九年六月五月初版第四刷発行

著者 芥川龍之介

発行者 井上達三

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京 七六五一(代表)

振替東京 四一〇一三

郵便番号 一〇一—九一

印刷 多田印刷株式会社
製本 株式会社 積信堂

(分類) 0393 (製品) 72006 (出版社) 4604

第六卷
目次

紀 行

支那游記

上海游記

江南游記

長江游記

北京日記抄

雜信一束

松江印象記

軍艦金剛航海記

槍ヶ嶽紀行

東北・北海道・新潟

日記・日録

田端日記

我鬼窟日録

長崎日録

二四 二三 二二 三一 二七 二〇 一四 一三 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

澄江堂日録

軽井沢日記

晩春売文日記

人物記

岩野泡鳴氏

豊島与志雄氏

菊池 寛氏

佐藤春夫氏

久米正雄氏

江口 渙氏

大須賀乙字氏

近藤浩一路氏

南部修太郎氏

菊池 寛氏又

小杉未醒氏

森 先 生

恒 藤 恭氏

久米正雄氏又

谷崎潤一郎氏

一六

一五

一四

一三

一二

一一

一〇

〇九

〇八

〇七

〇六

〇五

〇四

〇三

〇二

佐藤春夫氏又

飯田蛇笏氏

久保田万太郎氏

宇野浩二氏

室生犀星氏

滝田哲太郎氏

滝田哲太郎氏又

夏目先生と滝田さん

夏目 先生

大町桂月氏

剛才人と柔才人と

島木赤彦氏

萩原朔太郎君

犬養 健氏

内田百閒氏

一六

一五

一四

一三

一二

一一

一〇

〇九

〇八

〇七

〇六

〇五

〇四

〇三

〇二

一五

一四

一三

詩歌

発句

一九

短歌

二〇四

越びと 旋頭歌二十五首

二〇七

詩

二一四

*

我鬼窟句抄

二二〇

似無愁抄

二二三

我鬼句抄

二二三

蕩々帖 (その一)

二二六

蕩々帖 (その二)

二四〇

ひとまところ

二四六

澄江堂句抄

二四七

澄江堂雜詠

二四九

翻 訳

バルタザアル

春の心臓

クラリモンド

ババベックと婆羅門行者

別 稿

明 治

○〔少年〕

あの頃の自分の事

○〔開化の殺人〕

河 童

冬 心

俊 寛

大導師信輔の半生

二五

二六

二六

二七

三〇

三〇

三〇

三三

三四

三六

三八

三〇

未定稿

小説

絹帽子

遺書

天狗

夢幻

河内屋太兵衛の手紙

三つの指環

美しい村

〔題未定〕

戯曲

人と死と

尼と地藏

サロメ

解説

女親

評論

Die Philosophierung über

“Reigen”

「Lies in Scarlet」の言

写生論

聖ジュリアン物語

翻訳

囁く者

火と影との呪

断片

I—XV

吉田精一

三七九

三八五

三八七

三九〇

三九三

三九四

三九六

三九八

四〇〇

四〇二

四〇四

四〇六

四〇八

四一〇

紀

行

支那游記

自序

「支那游記」^①一卷は畢竟^{ひつじやう}天の僕に恵んだ（或は僕に災ひした）^②Journalist^③的才能の産物である。僕は大阪毎日新聞社の命を受け、大正十年三月下旬から同年七月上旬に至る一百二十余日の間に上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津等を遍歴した。それから日本へ帰つた後、「上海游記」や「江南游記」を一日に一回づつ執筆した。「長江游記」も「江南游記」の後にやはり一日に一回づつ執筆しかけた未成品である。「北京日記抄」^④は必しも一日に一回づつ書いた訣ではない。が、何でも全体を二日ばかりに書いたと覺えてゐる。「雜信一束」^⑤は画端書に書いたのを大抵はそのまま収めることにした。しかし僕のジャアナリスト的才能はこれ等の通信にも電光のやうに、——少くとも芝居の電光のやうに閃いてゐることは確である。

大正十四年十月

上海游記

一 海上

愈^{いよいよ}東京を立つと云ふ日に、長野草風氏が話に來た。聞けば長野氏も半月程後には、支那旅行に出かける心算ださうである。その時長野氏は深切にも船酔ひの妙薬を教へてくれた。が、門司から船に乗れば、二昼夜経つか経たない内に、すぐもう上海へ着いてしまふ。高が二昼夜はかりの航海に、船酔ひの薬などを携帯するやうぢや、長野氏の臆病も知るべしである。——かう思つた私は、三月二十一日の午後、筑後丸の舷梯に登る時にも、雨風に浪立つた港内を見ながら、再びわが長野草風画伯の海に怯なる事を氣の毒に思つた。

処が故人を輕蔑した罰には、船が玄海^{げんかい}にかかると同時に、見る見る海が荒れ初めた。同じ船室に當つた馬杉君と、上甲板の籐椅子に腰をかけてゐると、舷側にぶつかる浪の水沫が、時時頭の上へも降りかかつて来る。海は勿論まっ白になつて、底が轟轟煮え返つてゐる。その向うに何処かの島の影が、ぼんやり浮んで來たと思つたら、それは九州の本土だつた。が、船に慣れてゐる馬杉君は、巻煙草の煙を吐

①「支那游記」 大正十四年十一月改造社刊。

② Journalist ジャーナリスト（英）。

③ 大阪毎日新聞社、芥川は社員であつた。

④「上海游記」 大正十年八月九月大阪毎日新聞に連載。

⑤「江南游記」 大正十一年一月二月、同右。

⑥「長江游記」 大正十三年九月「女性」に發表。

⑦「北京日記抄」 大正十四年六月「改造」に發表。

⑧「雜信一束」 単行本「支那游記」に初めて収めた。

① 東京を立つ日 大正十年三月十九日。東京駅発午後五時半。

② 長野草風 長野守敏（1868〜1949）。旧姓安藤。日本画家。

大正十二年と十四年の二回中国に遊ぶ。

③ 三月二十一日

き出しながら、一向弱つたらしい気色も見せない。私は外套の襟を立てて、ポケットへ両手をつつこんで、時時仁丹を口に含んで、——要するに長野草風氏が船酔ひの薬を用意したのは、賢明な処置だと感服してゐた。

その内に隣の馬杉君は、バアか何処かへ行つてしまつた。私はやはり悠悠と、籐椅子に腰を下してゐる。はた眼には悠悠と構へてゐても、頭の中の不安はそんなものぢやない。少しでも体を動かしが最後、すぐに目まひがしさうになる。その上どうやら胃袋の中も、穏かならない気がし出した。私の前には一人の水夫が、絶えず甲板を往來してゐる。(これは後に発見した事だが、彼も亦実は憐れむべき船酔ひ患者の一人だつたのである。)その目まぐるしい往來も、私には妙に不愉快だつた。それから又向うの浪の中には、細い煙を挙げたトロオル船が、殆ど船体も没しないばかりに、際どい行進を続けてゐる。一体何の必要があつて、あんなに大浪をかぶつて行くのだから、その船も当時の私には、業腹で仕方になかつたものである。

だから私は一心に、現在の苦しさを忘れるやうな、愉快な事計り考へようとした。子供、草花、渦福の鉢、日本アルプス、初代ぼんた、——後は何だつたか覚えてゐない。いや、まだある。何でもワグネルは若い時に、英吉利へ渡る航海中、ひどい暴風雨に遇つたさうである。さうしてその時の経験が、

後年フレイゲンデ・ホルレンデルを書くのに大役を勤めたさうである。そんな事もいろいろ考へて見たが、頭は益ふらついて来る。胸のむかつくのも癒りさうぢやない。とうとうしまひにはワグネルなぞは、犬にでも食はれろと云ふ氣になつた。

十分ばかり経つた後、寢床に横になつた私の耳には、食卓の皿やナイフなどが一度に床へ落ちる音が聞えた。しかし私は強情に、胃の中の物が出さうになるのを抑へつけるのに苦心してゐた。この際これだけの勇氣が出たのは、事によると船酔ひに罹つたのは、私一人ぢやないかと云ふ懸念があつたおかげである。虚栄心なぞと云ふものも、かう云ふ時には思ひの外、武士道の代用を勤めるらしい。

処が翌朝になつて見ると、少くとも一等船客だけは、いづれも船に酔つた結果、唯一人の亜米利加人の外は、食堂へも出ずにしまつたさうである。が、その非凡なる亜米利加人だけは、食後も独り船のサロンに、タイプライタアを叩いてゐたさうである。私はその話を聞かされると、急に心もちが陽氣になつた。同時にその又亜米利加人が、怪物のやうな氣がし出した。實際あんなしげに遇つても、泰然自若としてゐるなどは、人間以上の離れ業である。或はあの亜米利加人も、体格検査をやつて見たら、齒が三十九枚あるとか、小さな尻尾が生えてゐるとか、意外な事実が見つかるかも知れない。——私は不相変馬杉君と、甲板の籐椅子に腰をかけながら、そん

風邪で発熱のため約一週間大阪に滞在、二十七日大阪発、二十九日門司から筑後丸で出発した。

一 故人 普通は死んだ人をいうが、ここでは友人の意味。

一 玄海 玄海灣、九州と奄美島のあいだをいう。波のあらいで有名。

一 馬杉君 未詳。

一 パーバー 未詳。

一 トロオル 船内の飲酒室。

一 トロオル 船

一 (英) トロオル 船

一 (英) トロオル 船

一 (英) トロオル 船

一 (英) トロオル 船

一 (英) トロオル 船

一 (英) トロオル 船

一 (英) トロオル 船

一 (英) トロオル 船

一 (英) トロオル 船

一 (英) トロオル 船

一 (英) トロオル 船

一 (英) トロオル 船

一 (英) トロオル 船

一 (英) トロオル 船

一 (英) トロオル 船

な空想を逞しくした。海は昨日荒れた事も、もうけりりと忘れたやうに、蒼蒼と和んだ右舷の向うへ、
 濟州島の影を横へてゐる。

二 第一瞥(上)

埠頭の外へ出たと思ふと、何十人とも知れない車屋が、いきなり我を包圍した。我我とは社の村田君、友住君、國際通信社のジョオンズ君並に私の四人である。抑、車屋なる言葉が、日本人に与へる印象は、決して薄くないものぢやない。寧ろその勢の好い所は、何処か江戸前な心もちを起させる位なものである。処が支那の車屋となると、不潔それ自身と云つても誇張ぢやない。その上ざつと見渡した所、どれも皆怪しげな人相をしてゐる。それが前後左右た一面に、いろいろな首をさし伸しては、大声に何か喚き立てるのだから、上陸したての日本婦人などは、少からず不気味に感ずるらしい。現に私なども彼等の一人に、外套の袖を引つ張られた時には、思はず背の高いジョオンズ君の後へ、退却しかかつた位である。

我我はこの車屋の包围を切り抜けてから、やつと馬車の上の客になつた。が、その馬車も動き出したと思ふと、忽ち馬が無鉄砲に、町角の煉瓦塀と衝突してしまつた。若い支那人の馭者は腹立たしさうに、びしびし馬を殴りつける。馬は煉瓦塀に鼻をつ

けた儘、無暗に尻ばかり躍らせてゐる。馬車は無論顛覆しさうになる。往來にはすぐに人だかりが出来。どうも上海では死を決しないと、うつかり馬車へも乗れないらしい。

その内に又馬車が動き出すと、鉄橋の架つた川の側へ出た。川には支那の達磨船が、水も見えない程群つてゐる。川の縁には緑色の電車が、滑かに何台も動いてゐる。建物はどうやら眺めても、赤煉瓦の三階か四階である。アスファルトの大道には、西洋人や支那人が気忙しさうに歩いてゐる。が、その世界的な群衆は、赤いタアバンをまきつけた印度人の巡査が相図をすると、ちやんと馬車の路を譲つてくれる。交通整理の行き届いてゐる事は、いくら最眞眼に見た所が、到底東京や大阪などの日本の都会の及ぶ所ぢやない。車屋や馬車の勇猛なのに、聊恐れをなしてゐた私は、かう云ふ晴れ晴れした景色を見てゐる内に、だんだん愉快な心もちになつた。

やがて馬車が止まつたのは、昔金玉均が暗殺された、東亜洋行と云ふホテルの前である。するとまつさきに下りた村田君が、馭者に何文だか錢をやつた。が、馭者はそれでは不足だと見えて、容易に出した手を引つこめない。のみならず口角泡を飛ばして、頻に何かまくし立ててゐる。しかし村田君は知らん顔をして、ずんずん玄關へ上つて行く。ジョオンズ友住の両君も、やはり馭者の雄辯などは、一向問題にもしてゐないらしい。私はちよいとこの支那

古妻の夜半は舞はめと春ふかみか(大正三年)とある。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

一 曲家。

人に、気の毒なやうな心もちがした。が、多分これが上海では、流行なのだらうと思つたから、さつさと跡について戸の中へはいつた。その時もう一度振り返つて見ると、馭者はもう何事もなかつたやうに、恬然と馭者台上に坐つてゐる。その位なら、あんなに騒がなければ好いのに。

我我はすぐに薄暗い、その辯裝飾はけばけばしい、妙な応接室へ案内された。成程これぢや金玉均でなくとも、いつ何時どんな窓の外から、ピストルの丸位は食はされるかも知れない。——そんな事を内考へてゐると、其処へ勇ましい洋服着の主人が、スリツパアを鳴らしながら、氣忙しさうにはいつて来た。何でも村田君の話によると、このホテルを私の宿にしたのは、大阪の社の沢村君の考案によつたものださうである。処がこの精悍な主人は、芥川龍之介には宿を貸しても、万一暗殺された所が、得にはならないと思つたものか、玄關の前の部屋の外には、生憎明き間はこわせんと云ふ。それからその部屋へ行つて見ると、ベッドだけは何故か二つもあるが、壁が煤けてゐて、窓掛が古びてゐて、椅子さへ満足なのは一つもなく、——要するに金玉均の幽霊でもなければ、安住出来る様な明き間ぢやない。そこで私はやむを得ず、沢村君の厚意は無になるが、外の三君とも相談の上、此処から余り遠くない万歳館へ移る事にした。

三 第一瞥(中)

その晩私はジョオンズ君と一しよに、シェツファアドといふ料理屋へ飯を食ひに行つた。此処は壁でも食卓でも、一と通り愉快に出来上つてゐる。給仕は悉支那人だが、隣近所の客の上には、一人も黄色い顔は見えない。料理も郵船会社の船に比べると、三割方は確に上等である。私は多少ジョオンズ君を相手に、イエスとかノオとか英語をしやべるのが、愉快なやうな心もちになつた。

ジョオンズ君は悠悠と、南京米のカリイを平げながら、いろいろ別後の話をした。その中の一つにこんな話がある。何でも或晩ジョオンズ君が、——やつぱり君附けにしてゐたのぢや、何だか友だちらしい心もちがしない。彼は前後五年間、日本に住んでゐた英吉利人である。私はその五年間、(一度喧嘩をした事はあるが)始終彼と親しくしてゐた。一しよに歌舞伎座の立ち見をした事もある。鎌倉の海を泳いだ事もある。殆夜中上野の茶屋に、盃盤狼藉としてゐた事もある。その時彼は久米正雄の一張羅の袴をはいた儘、いきなり其処の池へ飛込んだりした。その彼を君などと奉つてゐちや、誰よりも彼にすまないかも知れない。次手にもう一つ断つて置くが、私が彼と親しいのは、彼の日本語が達者だからである。私の英語がうまいからぢやない。——何

の同教徒が長い布を帽子がわりに頭にまきつけているもの。

二(6) 金玉均 (Kim Gyu-gu)。朝鮮李王朝末期の政治家。日本系の開化党をひきいて清国系の事大党と対立、やぶれて日本に亡命、のち上海に渡つて暗殺された。

二(7) 東亜洋行。上海北四川路にあつた日本人経営の旅館。

二(8) 沢村君。沢村幸夫。大阪毎日新聞社社員。

二(9) 万歳館。上海西華徳路にあつた日本人むけの旅館。

二(10) シェツファアド (Shepherd)。牧羊者の意。

二(11) 郵船会社。日本郵船株式會社。明治十八年設立。外国航路を最も多数所有。筑後丸をさす。

二(12) 南京米 (タイ・ビルマヤ)。中国産の米。粘質に乏しい。

二(13) カリイカレーライス curry and rice (英)。

でも或晩そのジヨオンズが、何処かのカツフエへ酒を飲みに行つたら、日本の給仕女がたつた一人、ぼんやり椅子に腰をかけてゐた。彼は日頃口癖のやうに支那は彼の道楽だが日本は彼の情熱だと呼号してゐる男である。殊に当時は上海へ引越して立つたさうだから、余計日本の思ひ出が懐しかったのに違ひない。彼は日本語を使ひながら、すぐにその給仕へ話しかけた。「何時上海へ来ましたか?」「昨日来たばかりでございます。」「ぢや日本へ帰りたくはありませんか?」給仕は彼にかう云はれると、急に涙ぐんだ声を出した。「帰りたいわ。」ジヨオンズは英語をしやべる合ひ間に、この「帰りたいわ」を繰返した。さうしてにやにや笑ひ出した。「僕もさう云はれた時には、Awfully sentimental になつたわけ。」

我我は食事をすませた後、賑かな四馬路を散歩した。それからカツフエ・パリジアンへ、ちよいとと舞踏を覗きに行つた。

舞踏場は可也広い。が、管絃樂の音と一しよに、電燈の光が青くなつたり赤くなつたりする工合は如何にも浅草によく似てゐる。唯その管絃樂の巧拙になると、到底浅草は問題にならない。其処だけはいくら上海でも、さすがに西洋人の舞踏場である。

我我は隅の卓子に、アニセツトの盃を舐めながら、真赤な着物を着たフイリツピンの少女や、背広を一着した亜米利加の青年が、愉快さうに踊るのを

見物した。ホイットマンが誰かの短い詩に、若い男女も美しいが、年をとつた男女の美しさは、又格別だとか云ふのがある。私はどちらも同じやうに、肥つた英吉利の老人夫婦が、私の前へ踊つて来た時、成程とこの詩を思ひ浮べた。が、ジヨオンズにさう云つたら、折角の私の詠嘆も、ふふんと一笑に付せられてしまつた。彼は老夫婦の舞踏を見ると、その肥れると痩せたとを問はず、吹き出したい誘惑を感じずるのださうである。

四 第一瞥(下)

カツフエ・パリジアンを引き上げたら、もう広い往来にも、人通りが稀になつてゐた。その癖時計を出して見ると、十一時がいくらか廻つてゐない。存外上海の町は早寝である。

但しあの恐るべき車屋だけは、未だ何人もうろつてゐる。さうして我我の姿を見ると、必何とか言葉をかける。私は屋間村田君に、不要と云ふ支那語を教はつてゐた。不要は勿論いらんの意である。だから私は車屋さへ見れば、忽ち悪魔払ひの呪文のやうに、不要不要を連発した。これが私の口から出た、記念すべき最初の支那語である。如何に私が欣然と、この言葉を車屋へ抛りつけたか、その間の消息がわからない読者は、きつと一度も外国語を習つた経験がないに違ひない。

二五 歌舞伎座 東京都中央区東銀座にある歌舞伎の劇場。壮麗な桃山建築様式で、戦災に会い、戦後修補された。

二六 盃盤狼藉 盃や皿など食器の散乱してゐること。

二七 久米正雄 (1861~1957) 作家、芥川とは一高・東大で同級以来の親友。

二八 道楽 hobby (英)。

二九 情熱 passion (英)。

三〇 Awfully sentimental 非常な感傷的に(英)。

三一 カツフエ・パリジアン Cate Parisian (仏)。

三二 アニセツト anisette (仏)。

三三 アニス という香料をいれたリキュール(洋酒)。

三四 ホイットマン Walt Whitman (1819~92)。

三五 アメリカの詩人。詩集「草の葉」が著名。この詩不明。

四一 不要 いらなく

我我我靴音を響かせながら、静かな往來を歩いて行つた。その往來の右左には、三階四階の煉瓦建が、星だらけの空を塞ぐ事がある。さうかと思ふと街燈の光が、筆太に大きな「当」の字を書いた質屋の白壁を見せる事もある。或時は又歩道の丁度真上に、女医生何とかの招牌がぶら下つてゐる所も通れば、漆喰の剝げた塀か何かに、南洋煙草の広告びらが貼りつけてある所も通つた。が、いくら歩いて行つても、容易に私の旅館へ来ない。その内に私はアニセツトの祟りか、喉が渴いてたまらなくなつた。「おい、何か飲む所はないかな。僕は莫迦に喉が渴くんが。」

「すぐ其処にカツフェが一軒ある。もう少しの辛抱だ。」

五分の後我我我兩人は、冷たい曹達を飲みながら、小さな卓子に坐つてゐた。このカツフェはパリジアンなどより、余程下等な所らしい。桃色に塗つた壁の側には、髪を分けた支那の少年が、大きなピアノを叩いてゐる。それからカツフェのまん中には、英吉利の水兵が三四人、頬紅の濃い女たちを相手に、だらしない舞踏を續けてゐる。最後に入口の硝子戸の側には、薔薇の花を売る支那の婆さんが、私に不要を食はされた後、ぼんやり舞踏を眺めてゐる。私は何だか画入新聞の挿画でも見るやうな心もちになつた。画の題は勿論「上海」である。

其処へ外から五六人、同じやうな水兵仲間が、一時にどやどやはいつて来た。この時一番莫迦を見たのは、戸口に立つてゐた婆さんである。婆さんは酔ばらひの水兵連が、乱暴に戸を押し開ける途端、腕にかけた籠を落してしまつた。しかも当の水兵連は、そんな事にかまふ所ぢやない。もう踊つてゐた連中と一しよに、氣違ひのやうにとち狂つてゐる。婆さんはぶつぶつ云ひながら、床に落ちた薔薇を拾ひ出した。が、それさへ拾つてゐる内には、水兵たちの靴に踏みにじられる。……

「行かうか？」

私もすぐに立ち上つた。が、我我の足もとには、点点と薔薇が散乱してゐる。私は戸口へ足を向けながら、ドオミエの画を思ひ出した。

「おい、人生はね。」

ジョオンズは婆さんの籠の中へ、銀貨を一つ抛りこんでから、私の方へ振返つた。

「人生は、——何だい？」

「人生は薔薇を撒き散らした路であるさ。」

我我はカツフェの外へ出た。其処には不相変黄包車が、何台か客を待つてゐる。それが我我の姿を見ると、我勝ちに四方から駆けつけて来た。車屋はもとより不要である。が、この時私は彼等の外にも、

(中)

四〇 欣欣然 心がよ

四一 ころびおどろさま

四二 「当」 中国語で

「当」は「質」の意味

四三 招牌 看板 中

四四 画入新聞 明治

初期の新聞で絵入り

の実話・物語を多くの

のせたもの

四五 ドオミエ Ho-

more Daumier (18

20-74) フランスの

諷刺画家

四六 黄包車 (中)

黄色のおおいかけ

た人力車

四七 里見さん 未詳

四八 薄田氏 薄田淳

介 (1871-1916) 詩

人。泣菫と号す。大

正元年から大阪毎日

新聞社に入り当時学

芸部長だった。

四九 西村貞吉 府立

第三中学時代の同級

生。旧姓斎藤。